『集史』第1巻「モンゴル史」の諸写本における チャガタイ・カンの息子達の順序の混乱

宇　野　伸　浩

（受付　2011年10月31日）

目　　次

はじめに
1.　問題の所在
2.　チャガタイ・カンの息子達の順序についての諸写本の記述
3.　写本間の異同の解釈
まとめ

は　じ　め　に

ラシードゥッディーン『集史』，とくにその第1巻「モンゴル史」は，モンゴル帝国史研究の根本史料として重視されている。第1巻の校訂テキストとして最も信頼できるのは，旧ソ連時代に出版されたアリー・ザーデの校訂によるテキストであるが，それは部族誌，オゴデイ・カン紀，フレグ・カンからガザン・カンに至るイルカン国史の部分にとどまり，本稿でとりあげるチャガタイ・カン紀については，まだ十分に信頼できる校訂テキストが出版されていない。筆者は最近，拙稿「『集史』第1巻「モンゴル史」の校訂テキストをめぐる諸問題」を発表し，現在利用できる校訂テキストについてその長所と短所などについて論じた。その末尾において，チャガタイの息子達の順序に関する写本間の著しい相違について言及したが，この点に関する各校訂テキストの扱いについてまとめるにとどまり，この写本間の相違をどのように解釈するかについては，紙幅の関係上言及しなかった。そこで，本稿において，チャガタイの息子達の順序に関する写本間の著しい相違をどのように解釈し，最終的にチャガタイの息子達の順序をどのように理解すべきかについて筆者の考えを述べてみたい。

なお，本稿で取り上げる『集史』の写本については，系統ごとに分類し，書体・書写年などの情報を付し，その略号を以下にあげておく。写本系統の分類は，宇野伸浩 2003a，宇野伸浩 2006a において論じた考え方に基づいている。

A. 『集史』「モンゴル史」増補版系統の写本

（1） 増補版系統の写本 A-1

①ウズベキスタン 1620：ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所 Abu Rayhon Beruni Institute of Oriental Studies, Tashkent, MS. 1620. ナスフ体，書写年は不明。

②トプカプ 1518：トプカプ・サライ博物館付属図書館 Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, MS. Revān köşkü 1518. ナスフ体，ヒジュラ暦717年シャアバーン月終わり頃（1317年11月上旬）にバグダードで書写。

（2） 増補版系統の写本 A-2

③大英 16688：大英図書館 British Library, MS. Or. Add. 16688. ナスフ体，14世紀ごろの書写とする説がある。

B. 『集史』「モンゴル史」初版系統の写本

（1） 初版系統の写本 B-1

④フランス国立 209：フランス国立図書館 Bibliothèque Nationale, MS. Supplément persan 209. ナスターリーク体，ヒジュラ暦837年ラジャブ月（1434年 2 － 3 月）に書写。

⑤東洋写本 D66：東洋写本研究所 Институт восточных рукописей（Institute of Oriental Manuscripts）, St.-Petersburg, MS. D66. ナスターリーク体。

（2）初版系統の写本 B-2

⑥ロシア国立 46：ロシア国立図書館 Российская национальная библиотека（National Library of Russia）, St.-Petersburg, MS. PNS46（旧サルティコフ・シュチェドリン公共図書館写本番号2458）. ナスフ体，ヒジュラ暦810年ムハッラム月の半ば（1407年 6 月）に書写。

1. 問題の所在

『集史』第 1 巻「モンゴル史」の写本間の相違として最も大きな点は，部族誌における記述の相違であり，この点については，これまで，志茂碩敏 1995，志茂智子 1995，SHIMO 1996，赤坂恒明 1998，白岩一彦 1993，白岩一彦 1998，宇野伸浩 2003a，宇野伸浩 2006a において論じられ，最終的な結論として，第 1 巻「モンゴル史」にはラシード自身による増補加筆がなされたこと，従って，第 1 巻「モンゴル史」には初版系統の写本と増補版系統の写本が存在することを，写本の欄外の加筆を手がかりにして白岩一彦と筆者が解明した。

ところが，チャガタイの息子達の年齢順については，初版系統の写本と増補版系統の写本との相違も存在するが，それよりも初版系統の写本間での相違の方が大きく，ラシード自身

の増補加筆では説明できない別の問題があることが考えられる。なぜこの部分について写本間の相違が著しいかについて，これまで論じられたことはない。既刊の校訂テキストと訳注を見てみると，ブロシェのテキスト（Blochet 1911）とそれを写しているキャリーミーのテキスト（Karīmī 1959）はフランス国立 209 にもとづき，ロウシャンのテキスト（Rawshan & Mūsawī 1994）は，トプカプ 1518 にもとづいているので，それぞれの写本のチャガタイの息子達の順序を反映している。またボイルの英訳（Boyle 1971）はブロシェのテキストを利用しているのでフランス国立 209 に，サクストンの英訳（Thackston 1999）はロウシャンのテキストを利用しているのでトプカプ 1518 にもとづいていることになる。ベルホフスキーのロシア語訳（Верховский 1960）は，ウズベキスタン 1620 を底本としているのでそれにもとづき，脚注においてブロシェのテキストに言及している。トプカプ 1518 とウズベキスタン 1620 はチャガタイの息子達の順序について同じであるので，現在までに刊行された校訂テキストと訳注では，増補版 A-1 系統（トプカプ 1518，ウズベキスタン 1620）の情報と初版 B-1 系統（フランス国立 209）の情報の 2 種類が示されていることになる。

この問題を考える上でもう一つの手掛かりは，チャガタイ・カン紀の本文の中で，グユク・カンがチャガタイ家の当主としてイス・モンケを任命したことに関する記事に，チャガタイの息子たちの順序について言及があることである。実は，この部分も写本間の相違が著しい。そこで次章において，チャガタイの息子達の順序とイス・モンケの任命の記事について，写本間の相違を整理しておきたい。

2. チャガタイ・カンの息子達の順序についての諸写本の記述

(1) チャガタイ・カンの息子達の順序

チャガタイの息子達が，各写本にどのような順序で記述されているかを列挙する前に，本稿で取り上げる写本に登場する 8 人のチャガタイの息子達の特徴を簡単にまとめておく。それに続いて，写本系統ごとに各写本のチャガタイの息子達の順序を示していくことにする。

- モエトゥゲン Mö’etügen＜Mūātūkān…母親はチャガタイの第 1 カトンのイェスルン・カトン。チャガタイが後継者に指名するがバーミヤンの戦いで戦死する。息子のカラ・フレグがチャガタイ家の第 2 代当主となる。
- モチ・イェベ Möči Yebe＜Mūjī yebe…母親は，モエトゥゲンの母親のイェスルン・カトンのオルドに仕えていた女奴隷。母親の血筋が低いためチャガタイに重んじられなかった。
- ベルゲシ Belgeši＜Belkeshī…モエトゥゲンの死後，チャガタイが後継者に指名するが13歳で死去。

・サルバン Sarban＜Sārbān…母親などについての詳しい情報はない。

・イス・モンケ＜Yisü Möngke＜Yīsū mūnkkā…グユク・カンがチャガタイ家の第 3 代当主に指名する。

・バイダル Baydar＜Bāīdār…息子のアルグがチャガタイ家の第 5 代当主となる。

・カダカイ Qadaqai＜Qadāqaī…母親はイェスルン・カトンの姉妹のテルケン・カトン。イェスルン・カトンの死後チャガタイがテルケン・カトンを娶った。

・バイジュ Baiju＜Bāījū…母親などについての詳しい情報はない。

（ア） 増補版系統の写本 A-1

①トプカプ 1518（fol. 168a-170a），②ウズベキスタン 1620（fol. 139b/21）

1. モエトゥゲン مواتوكان Mūātūkān
2. モチ・イェベ موجى يبه Mūjī yebe
3. ベルゲシ بلكشى Belkeshī
4. サルバン＜サルマン سارمان Sārmān（トプカプ 1518 の系図ではサルバン Sārbān）
5. イス・モンケ＜イスン・モンケ ييسون مونككا Yīsūn mūnkkā
6. バイダル بايدر Bāīdar

（イ） 増補版系統の写本 A-2

③大英 16688（fol. 8b/8）

1. モエトゥゲン مواتوكان Mūātūkān
2. モチ・イェベ موجى يبه Mūjī yebe
3. ベルゲシ بلكشى Belkeshī
4. サルバン＜サルマン سارمان Sārmān
5. イス・モンケ＜イスン・モンケ ييسون مونكا Yīsūn mūnkkā
6. バイダル بايدر Bāīdar

（ウ） 初版系統の写本 B-1

④フランス国立 209（fol. 210a/5-6），⑤東洋写本 D66（fol. 198b/5-6）[1)]

1. モチ・イェベ موجى يبه Mūjī yebe
2. モエトゥゲン مواتوكان Mūātūkān
3. ベルゲシ بلكشى Belkeshī
4. サルバン ساربان Sārbān
5. イス・モンケ ييسومونككا Yīsū mūnkkā

1） 東洋写本 D66 は，チャガタイの息子の名前ごとに解説を列挙している箇所ではベルゲシとサルバンの順が逆転しているが，その直前の名前のみを列挙した箇所（fol.198b/5-6）ではこの順であり，同系統のフランス国立 209 の順序と一致する。

6. バイダル بایدار Bāīdār
7. カダカイ قداقی Qadāqaī
8. バイジュ بایجو Bāījū

（エ） 初版系統の写本 B-2

⑥ロシア国立 46（fol. 191a/11-13）

1. モチ・イェベ موجی یبه Mūjī yebe
2. モエトゥゲン مواتوکان Mūātūkān
3. イス・モンケ ییسو مونککا Yīsū mūnkkā
4. ベルゲシ＜ベルデスィ بلدسی Beldesī
5. バイジュ＜バイフ بایخو Bāīkhū
6. バイダル بایدار Bāīdār[2)]
7. カダカイ قداقی Qadāqaī
8. サルバン ساربان Sārbān

6 写本のチャガタイの息子達の順序に関する記述の特徴を比較すると，息子の人数は増補版系統（A-1，A-2）が 6 人，初版系統（B-1，B-2）が 8 人であること，第 1 子は増補版系統（A-1，A-2）がモエトゥゲン，初版系統（B-1，B-2）がモチ・イェベであることの 2 点がまず気がつく相違点であり，増補版系統と初版系統ではっきり特徴が分かれているように見える。ところが，第 3 子から第 6 子を比較すると，増補版系統の 3 写本と初版系統のフランス国立 209，東洋写本 D66 の 2 写本すなわち A-1，A-2，B-1 系統は人名と順序がすべて同じであり，第 3 子ベルゲシ，第 4 子サルバン，第 5 子イス・モンケ，第 6 子バイダルの順である。それに対して，B-2 系統のロシア国立 46 のみが孤立しており，全く異なる順で第 3 子以下が並んでいる。なぜこのような錯綜した状況が生じたのであろうか。この問いへの答えについては，チャガタイの第 1 子と第 3 子について言及したイス・モンケの任命の記事を検討した上で述べてみたい。

（2） イス・モンケのチャガタイ家当主への任命に関する記事

チャガタイの息子イス・モンケをグユク・カンがチャガタイ家の当主に任命したことを述べた記事の中に，チャガタイの最年長の息子と第 3 子についての言及がある。まず，写本系統ごとに各写本の記事の原文と和訳を示した上で，写本間の相違を分析してみたい。下線の部分が，チャガタイの息子モエトゥゲンとイス・モンケの年齢順について言及した箇所で

2） ロシア国立 46 は，チャガタイの息子の名前に解説を付した箇所では誤って第 6 子と第 7 子をともにカダカイとしているが，その前の名前のみを列挙した箇所（fol.191a/11-13）では第 6 子を正しくバイダルとしている。

ある。

（ア） 増補版系統の写本 A-1

①トプカプ 1518，fol. 173a

「［オゴデイ・］カアンとチャガタイが亡くなった後，カラ・フレグが，チャガタイの年長の息子モエトゥゲンの子供達の中で最年長者であり，――モエトゥゲンも父の生前にチンギス・カンの時代にバーミヤンの砦で矢の傷により亡くなっていた――後継者であったにもかかわらず，グユク・カンは，チャガタイの 3 番目の息子のイス・モンケを，彼がモンケ・カアンと対立していたという理由で，チャガタイ・ウルスの王位に送った。モンケ・カアンは，カアンになったとき，カラ・フレグにイス・モンケを殺せというヤルリクを与えた。」

بعد از وفات قان و جغتای هر چند قرا هولاکو مهترین فرزندان پسر بزرگتر جغتای مواتوکان کی هم در حیاة پدر در عهد جینککیز خان بقلعه بامیان بزخم تیر نمانده بود ولی العهد بود کیوک خان سوم پسر جغتای ییسومنککو را جهت انک با منککو قان مخالفت می نمود بپادشاهی الوس جغتای فرستاد و چون منککو قان قان شد قرا هولاکو را یرلیغ داد تا ییسو منککو را بکشد.

②ウズベキスタン 1620，fol. 143b

「［オゴデイ・］カアンとチャガタイが亡くなった後，カラ・フレグが，チャガタイの年長の息子モエトゥゲンの子供達の中で最年長者であり，――モエトゥゲンも父の生前にチンギス・カンの時代にバーミヤンの砦で矢の傷により亡くなっていた――後継者であったにもかかわらず，グユク・カンは，チャガタイの 3 番目の息子のイス・モンケを，彼がモンケ・カアンと対立していたという理由で，チャガタイ・ウルスの王位に送った。モンケ・カアンは，カアンになったとき，カラ・フレグにイス・モンケを殺せというヤルリクを与えた。」

بعد از وفات قآن و جغتای هر چند قرا هولاکو مهترین فرزندان پسر بزرگتر جغتای مواتوکان کی هم در حیاة پدر در عهد جینککیز خان بقلعه بامیان بزخم تیر نمانده بود ولی العهد بود کیوک خان سوم پسر جغتای ییسومنککو را جهت انک با منککو قان مخالفت می نمود بپادشاهی الوس جغتای فرستاد و چون منککو قان قآن شد قرا هولاکو را یرلیغ داد تا ییسو منککو را بکشد.

（イ） 増補版系統の写本 A-2

③大英 16688，fol. 15a

「［オゴデイ・］カアンとチャガタイが亡くなった後，カラ・フレグが，チャガタイの最年長の息子モエトゥゲンの子供達の中で最年長者であり，――モエトゥゲンも父の生前にチンギス・カンの時代にバーミヤンの砦で矢の傷により亡くなっていた――後継者であったにもかかわらず，グユク・カンは，チャガタイの 3 番目の息子のイス・モンケを，彼がモンケ・カアンと対立していたという理由で，チャガタイ・ウルスの王位に送った。モンケ・カアンは，

カアンになったとき，カラ・フレグにイス・モンケを殺せというヤルリクを与えた。」

بعد از وفات قآن و جغتای هر چند قرا هولاکو مهین فرزندان پسر بزرگترین جغتای مواتوکان که هم در حیات پدر در عهد جینککیز خان بقلعه بامیان بزخم تیر نمانده بود ولی العهد بود کیوکخان سوم پسر جغتای بیسومنککو را جهت انک با منککو قان مخالفت می نمود بپادشاهی الوس جغتای فرستاد و چون منککو قان قآن شد قرا هولاکو را یرلیغ داد تا بیسو منککو را بکشند.

（ウ） 初版系統の写本 B-1

④フランス国立 209，fol. 214b

「［オゴデイ・］カアンとチャガタイが亡くなった後，カラ・フレグが，モエトゥゲンの子供達の最年長者であり最年長の息子であり，――モエトゥゲンも父の生前にチンギス・カンの時代にバーミヤンの砦で矢の傷により亡くなっていた――後継者であったにもかかわらず，グユク・カンは，チャガタイの 3 番目の息子を，彼がモンケ・カアンと対立していたという理由で，チャガタイ・ウルスの王位に送った。モンケ・カアンがカアンになったとき，カラ・フレグにイス・モンケを殺せというヤルリクを与えた。」

بعد از وفات قاآن و جغتای هر چند قرا هولاکو مهین فرزندان و پسر بزرگترین مواتوکان بود که هم در حیات پدر در عهد جینکیز خان بقلعه بامیان بزخم تیر نمانده بود ولی العهد بود کیوک خان سوم پسر جغتای را جهت آن که با منککو قآن مخالفت می نمود بپادشاهی الوس جغتای فرستاد و چون منککا قاآن قاآن شد قرا هولاکو را یرلیغ داد تا بیسو منککا را بکشد.

⑤東洋写本 D66，fol. 203a

「［オゴデイ・］カアンとチャガタイが亡くなった後，カラ・フレグが，モエトゥゲンの子供達の最年長者であり最年長の息子であり，――モエトゥゲンも父の生前にチンギス・カンの時代にバーミヤンで矢の傷により亡くなっていた――後継者であったにもかかわらず，グユク・カンは，チャガタイの 3 番目の息子を，彼がモンケ・カアンと対立していたという理由で，ウルスの王位に送った。モンケ・カアンがカアンになったとき，カラ・フレグにイス・モンケを殺せというヤルリクを与えた。」

بعد از وفات قاآن و جغتای هر چند قرا هولاکو مهین فرزندان و پسر بزرگترین مواتوکان بود که هم در حیات پدر در عهد جینکیز خان بامیان بزخم تیر نمانده بود و ولی العهد بود کیوک خان سوم پسر جغتای را جهت آن که با منککو قآن مخالفت می نمود بپادشاهی الوس فرستاد و چون منککا قآن قاآن شد قرا هولاکو را یرلیغ داد تا بیسو منککا را بکشد.

（エ） 初版系統の写本 B-2

⑥ロシア国立 46，fol. 194b

「［オゴデイ・］カアンとチャガタイが亡くなった後，カラ・フレグが，チャガタイの最年長の息子モエトゥゲンの子供達の中で最年長者であり，――モエトゥゲンも父の生前にチンギス・カンの時代にバーミヤンの砦で矢の傷により亡くなっていた――後継者であったにもかかわらず，グユク・カンは，チャガタイの 3 番目の息子のイス・モンケを，彼がモンケ・カアンと対立していたという理由で，チャガタイ・ウルスの王位に送った。モンケ・カアンは，カアンになったとき，カラ・フレグにイス・モンケを殺せというヤルリクを与えた。」

بعد از وفات قاآن و جغتای هر چند قرا هولاکو مهین فرزندان پسر بزرگترین جغتای مواتوکان کی هم در حیاة پدر در عهد جینککیز خان بقلعه بامیان بزخم تیر نمانده بود ولی العهد بود کیوک خان سوم پسر جغتای بیسومنککا را جهت انک با منککو قاآن مخالفت می نمود بپادشاهی اولوس جغتای فرستاد و چون منککو قاآن قاآن شد قرا هولاکو را یرلیغ داد تا بیسو منککا را بکشد.

上の記事の下線部分の違いについてまとめておくと，1 番目の下線部については，モエトゥゲンがチャガタイの息子達の最年長とする写本が A-2 系統の大英 16688 と B-2 系統のロシア国立 46 の 2 写本，チャガタイの息子達の年長とするのが A-1 系統のトプカプ 1518 とウズベキスタン 1620 の 2 写本，「チャガタイ」の語がないことにより，カラ・フレグがモエトゥゲンの息子たちの最年長であるとしか読めない写本が B-1 系統のフランス国立 209 と東洋写本 D66の 2 写本である。

一方，2 番目の下線部については，チャガタイの 3 番目の息子イス・モンケと述べている写本が，A-1 系統のトプカプ 1518，ウズベキスタン 1620，A-2 系統の大英 16688，B-2 系統のロシア国立 46 の 4 写本であり，「イス・モンケ」の語がなく，チャガタイの 3 番目の息子とだけ記し名前をあげてない写本が，B-1 系統のフランス国立 209 と東洋写本 D66 の 2 写本である。

双方の下線部の特徴を合わせると，もっとも孤立した特徴を持つのは B-1 系統の写本であることが分かる。

3. 写本間の異同の解釈

さて，チャガタイの息子達の順序に関して記している前章で取り上げた 2 箇所（チャガタイの息子達の名前を列挙した箇所，イス・モンケの任命に関する記事）について分析してみると，もっとも孤立した特徴を持つ写本が，奇妙なことに上記 2 箇所では異なっていることが分かる。すなわち，チャガタイの息子達の名前を列挙した箇所では B-2 系統のロシア国立

46 が孤立した特徴を持ち，イス・モンケの任命に関する記事の中でチャガタイの第 1 子と第 3 子に言及した箇所では B-1 系統のフランス国立 209 と東洋写本 D66 が孤立した特徴を持つのである。なぜこのような奇妙な食い違いが生じるのであろうか。一般的には，特定の系統が一貫して孤立した特徴を持つならば，その系統だけが書写の過程で加筆修正されたと考えれば説明がつきやすい。

この矛盾については，次のように解釈すれば無理なく説明できる。上記で検討した 2 箇所の記述の間にはもともとある矛盾が存在する。それは，イス・モンケの任命に関する記事の中ではイス・モンケをチャガタイの第 3 子と述べながら，チャガタイの息子達の名前を列挙し順序を示した箇所では，イス・モンケを第 5 子とする写本が多いのである。そして，書写時にこの矛盾に気がついた書写者がこの矛盾を解消するために，イス・モンケの任命に関する記事から「イス・モンケ」の語を削除し，誰が第 3 子か分からなくしたものが B-1 系統の写本フランス国立 209 と東洋写本 D66 であり，逆に「チャガタイの 3 番目の息子のイス・モンケ」とする文にあわせて，チャガタイの息子達の名前を列挙した箇所でイス・モンケを第 3 子に移動し息子達の順序を入れ替えたものが B-2 系統の写本ロシア国立 46 だと解釈すれば，すべて説明がつくのである。つまり，イス・モンケに関する矛盾の解消の仕方が B-1 系統と B-2 系統では異なっていたため，両者がともに初版系統の写本でありながら，書写段階の操作で相違が大きくなってしまったのである。

同様に，モエトゥゲンに関する矛盾についても，B-1 系統のフランス国立 209 と東洋写本 D66 は，息子達の名前を列挙した箇所ではモチ・イェベが第 1 子であるため，「チャガタイの最年長の息子モエトゥゲン」と記したイス・モンケ任命の記事から「チャガタイ」を削除することにより，矛盾を解消したのである。一方，B-2 系統のロシア国立 46 では，チャガタイの息子達の名前を列挙した箇所ではモチ・イェベを第 1 子としながら，イス・モンケ任命の記事では「チャガタイの最年長の息子モエトゥゲン」と述べ，矛盾した記述が残っている。

書写時に改変があったとする以上の解釈が正しいとすれば，初版系統の B-1，B-2 系統で改変される前の記事を残しているのは，チャガタイの息子達の名前を列挙した箇所に関しては B-1 系統，イス・モンケの任命の記事については B-2 系統だということになる。

同様の方法により，初版系統と増補版系統の間の相違についても解釈がつく部分がある。チャガタイの息子達の名前を列挙した箇所において，初版系統の B-1, B-2 系統では第 1 子をモチ・イェベ，第 2 子をモエトゥゲンとするが，増補版系統の A-1, A-2 系統では第 1 子をモエトゥゲン，第 2 子をモチ・イェベとする。この相違については，増補版の作成時にラシード自身が，あるいはその書写の過程で書写者が，イス・モンケ任命の記事に「チャガタイの最年長の息子モエトゥゲン」とあることと，初版でモチ・イェベをチャガタイの第 1 子とし

ていることの矛盾に気がつき，モチ・イェベとモエトゥゲンの順序を入れ替え，モエトゥゲンを第 1 子，モチ・イェベを第 2 子としたと解釈すれば説明がつく。ただし，A-2 系統の大英 16688 についてはこの解釈で説明がつくが，A-1 系統では若干問題が残る。なぜなら，A-1 系統のトプカプ 1518 とウズベキスタン 1620 では，イス・モンケ任命の記事において「チャガタイの年長（buzurgtar）の息子モエトゥゲン」とあり，最上級ではなく比較級が使われているからである。これについては，A-1 系統の写本の書写時の改変と考えておく。文法的には比較級の方が意味を取りやすい。

さて，以上のように解釈したとしても，なぜもともとチャガタイの息子達の順序について，チャガタイの息子達の名前を列挙した箇所とイス・モンケの任命の記事の間で矛盾があったのかという点が疑問として残るし，この点が解決しなければ，チャガタイの息子達の順序は確定しない。つまり，上述の解釈が正しいとすれば，『集史』初版のチャガタイ・カン紀には以下のように記されていたことになる。なお，初版系統 B-1，B-2 の写本にチャガタイの息子を 8 人あげている点については，推測を含むが，8 人のうちの最後の 2 人カダカイとバイジュについては，初版完成後に，部族誌を中心に大幅に増補加筆を行った増補版の作成とは別の過程で増補加筆されたと考えておく[3)]。

1）　チャガタイの息子達の名前と順序

「彼（チャガタイ）には以下順序で 6 人の息子がいた。第 1 番目モチ・イェベ，第 2 番目モエトゥゲン，第 3 番目ベルゲシ，第 4 番目サルバン，第 5 番目イス・モンケ，第 6 バイダル。」

او را شش پسر بوده اند بدین تفصیل و ترتیب اول موجی یبه دوم مواتوکان سوم بلکشی چهارم ساربان پنجم ییسو مونککا ششم بایدر.

2）　イス・モンケ任命の記事

「［オゴデイ・］カアンとチャガタイが亡くなった後，カラ・フレグが，チャガタイの最年長の息子モエトゥゲンの子供達の中で最年長者であり，――モエトゥゲンも父の生前にチンギス・カンの時代にバーミヤンの砦で矢の傷により亡くなっていた――後継者であったにもかかわらず，グユク・カンは，チャガタイの 3 番目の息子のイス・モンケを，彼がモンケ・カアンと対立していたという理由で，チャガタイ・ウルスの王位に送った。モンケ・カアンは，カアンになったとき，カラ・フレグにイス・モンケを殺せというヤルリクを与えた。」

3）　赤坂恒明 2009では，このチャガタイの息子のカダカイとバイジュはモエトゥゲンの 2 子の竄入と解釈している（赤坂恒明 2009, p. 65, n.22）。

بعد از وفات قاآن و جغتای هر چند قرا هولاکو مهین فرزندان پسر بزرگترین جغتای مواتوکان کی
هم در حیاة پدر در عهد جینککیز خان بقلعه بامیان بزخم تیر نمانده بود ولی العهد بود کیوک خان
سوم پسر جغتای ییسومنککا را جهت انک با منککو قاآن مخالفت می نمود بپادشاهی اولوس
جغتای فرستاد و چون منککو قاآن قاآن شد قرا هولاکو را یرلیغ داد تا ییسو منککا را بکشد.

この二つの記事は一見してわかるように矛盾がある。そのため，その矛盾の解消ために，B-1 系統の写本と B-2 系統の写本では，上述の修正が行われたのである。では，この矛盾はなぜ生じたのであろうか。ここで注目したいのはモエトゥゲンとモチ・イェベの違いである。モエトゥゲンは，上述のように，チャガタイの第一カトンのイェスルン・カトンの息子である。一方，モチ・イェベはイェスルン・カトンのオルドに仕えていた女奴隷から生まれた息子である。当時の考え方として，カンの息子のうち，カトンから生まれた男子，すなわち嫡子と，側室や女奴隷などから生まれた男子，すなわち庶子は区別されていたはずであり，当主の地位の継承権があるのは当然カトンから生まれた男子のみである。『集史』は，男子について母親を問わずにすべてに順序をつけて記載していることが多いが，カトンから生まれた男子，すなわち嫡子のみを数えあげることがあってもおかしくない。例えば，『集史』「チンギス・カン紀」では，カトンごとに息子に順位をつけており、庶子を入れて全ての息子達を順序づけることはしていない。しかし，イルカン国においては，アルグン・カンの母親もガザン・カンの母親もカトンではなかったことから，『集史』の多くの章では男子について嫡子も庶子も区別せず，カトン以外から生まれた男子もすべて列挙することにより，「ガザン・カン紀」や「アルグン・カン紀」の記述に不都合が生じないように配慮した可能性がある。

そのような考え方に立ち，チャガタイの息子達のうちカトンから生まれた男子すなわち嫡子のみを数え上げることがあったとすれば，最年長はモエトゥゲンになる。モエトゥゲンのすぐ下の弟は，ベルゲシである。ベルゲシの母親が誰であるか『集史』に情報はないが，モエトゥゲンの死後，チャガタイがベルゲシを後継者に指名していることから見て，第 1 カトンであるイェスルン・カトンの子であった可能性が高い。従って，嫡子の第 2 子はベルゲシである。ベルゲシのすぐ下の弟サルバンについては情報が少ない。この点については推測を含むが，情報が少ないこと，後継者に指名され形跡がないことから庶子とみておく。サルバンのすぐ下の弟はイス・モンケである。イス・モンケはグユク・カンによりチャガタイ家の当主に任命されていることから見て，第 1 カトンのイェスルン・カトンの子であった可能性が高い。従って，イス・モンケは嫡子の第 3 子となる。以上のように考えれば，イス・モンケの任命記事では，チャガタイ家の当主を継承することが可能な嫡子のみを対象に数えて，「チャガタイの 3 番目の息子（＝嫡子）イス・モンケ」と記したと解釈することが可能になる。一方，チャガタイの息子たちの名前を列挙した箇所は，嫡子と庶子を含めたすべてのチャ

ガタイの男子を列挙しているので，両者の間には必然的に表面上矛盾が生じることになる。

以上の解釈が正しいとすれば，上述の2箇所の記述は，どちらかが間違っているわけではなく，異なる基準でチャガタイの息子の順序を記していることになる。それを矛盾していると捉えて，チャガタイ・カン紀の書写の際に修正を行ったことによりチャガタイの息子の順序に関して混乱が生じ，写本間で著しい相違が生じてしまったと考えられる。

ま と め

『集史』の記述が写本間で相違がある場合，書写時の単純ミスが原因の場合もあるが，書写者が文章を理解した上で，意図的に改変する場合もあったと考えられる。本稿で検討したチャガタイの息子達の順序の事例は，書写者が内容に矛盾があると判断し，矛盾解消のために意図的に修正していることが判明した興味深い事例である。このような改変の理由を明らかにするためには，ある事項に関する写本間の相違を詳細にかつ総合的に検討し，なぜそのような相違が発生したかを解明することが必要であろう。

チャガタイの息子達について，本稿で明らかになった点を整理すると，以下のとおりである。

1. 初版では，チャガタイの息子は，第1子モチ・イェベ，第2子モエトゥゲン，第3子ベルゲシ，第4子サルバン，第5子イス・モンケ，第6子バイダルの6人であった。
2. 増補版の作成あるいはその書写の過程で，チャガタイの第1子モチ・イェベとある記述とモエトゥゲンをチャガタイの最年長の息子とする記述との矛盾を解消しようとして，モエトゥゲンとモチ・イェベを入れ替えモエトゥゲンが第1子となった可能性が高い。
3. 初版の書写の過程で，モエトゥゲンをチャガタイの最年長の息子とする記述，イス・モンケをチャガタイの3番目の息子とする記述との矛盾を解消しようとして，写本により異なる解消方法，すなわち，1）フランス国立209，東洋写本D66では，イス・モンケのチャガタイ家当主任命の記事から「チャガタイ」「イス・モンケ」を削除する，2）ロシア国立46では，チャガタイの息子達の順序を入れ替えイス・モンケを第3子に移動する，という方法がとられた可能性が高い。
4. 初版の完成後に，ラシード自身による，部族誌を中心とした増補加筆による増補版の作成とは別の過程で，当該の写本が書写された時期までの間に，チャガタイの息子として第7子カダカイ，第8子バイジュが加筆された。
5. 初版の記述中に見られる，チャガタイの息子達の順序についての矛盾は，チャガタイの嫡子と庶子を含めたすべての息子を数え上げる場合と，カトンから生まれた嫡子のみを数え上げる場合があったと解釈すると，矛盾が解消する。

≪『集史』校訂テキスト・翻訳一覧≫

Али-заде, А.А.（ed.）1965–1980, *Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джами‘ ат-Таварих.*（Том I, Часть 1, 1965, Том II, Часть 1, 1980）Москва.
_____ 1957, Арендс（tr.）*Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джами‘ ат-Таварих.* Том III, Баку.
Березин, И.Н.（ed.）1858–1888, *Сборник летописей, История монголов. Сочинение Рашид-Эддина.*（ТВОРАО, ч.V, 1858, ч.VII ,1861, ч.VIII, 1868, ч.XV, 1888）С.-Петербург.
Blochet, E.（ed.）1911, *Djami el-Tévarikh par Fadl Allah Rashid ed-Din.* Tome II, Leyden-London.
Boyle, J.A. 1971, *The Successors of Genghis Khan.* New York.
Jahn, K.（ed.）1940, *Geschichte Ġāzān-hān's aus dem Ta'rīḫ-i-Mubārak-i-Ġāzānī des Rašīd al-Dīn Faḍlallāh b. 'Imād al-Daula Abūl-Ḫair.* London.
_____ 1957, *Ta'rīḫ-i-Mubārak-i-Ġāzānī des Rašīd al-Dīn Faḍl Allāh Abī-l-Ḫair, Geschichte der Ilḫāne Abāġā bis Gaiḫātū（1265–1295）.* 's-Gravenhage.
Karīmī, B.（ed.）1338/1959, *Rashīd al-Dīn, Jāmi‘ al-Tavārīkh.* 2 jild., Tehran.
Quatremère, E.（ed.）1836, *Raschid-eldin, Hisoire des Mongols de la Perse.* Paris.
Rawshan, M. & Mūsawī, M.（ed.）1373/1994, *Jāmi‘ al-Tavārīkh.* 4 vols, Tehran.
Rawshan, M. 2005, *Jāmi‘ al-Tavārīkh*（*History of India, Indus and Cashmere*）. Tehran.
Смирнова, О.И. 1952, *Рашид-ад-Дин, Сборник летописей*, Том I, кн. II, М.-Л..
Thackston, W.M. 1999, *Rashiduddin Fazlullah, Jami‘ u 't-Tawarikh: Compendium of Chronicles; A History of the Mongols.* 3 vols,（Sources of Oriental Languages and Literatures 45）Cambridge.
Верховский, Ю.П. 1960, *Рашид-ад-Дин, Сборник летописей.* Том II, М.-Л..

≪参　考　文　献≫

〔日本文〕
赤坂恒明 1998「『五族譜』モンゴル分支と『集史』諸写本」『アジア・アフリカ言語文化研究』55, pp. 141–164.
_____ 2005『ジュチ裔諸政権史の研究』東京：風間書房。
_____ 2009「ホシラの西行とバイダル裔チャガタイ家」『東洋史研究』67-4, pp. 36–69.
足利惇氏・田村実造・恵谷俊之 1968『イランの歴史と言語』京都：京都大学。
宇野伸浩 2002「『集史』イラン国民議会図書館写本の欄外の加筆」松田孝一（編）『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究　平成12～13年度学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書』pp. 129–149.
_____ 2003a「ラシード・ウッディーン『集史』の増加加筆のプロセス」『人間環境学研究』1-1·2, pp. 39–62.
_____ 2003b「イスラム議会図書館における『集史』写本調査」『日本モンゴル学会紀要』33, pp. 95–96.
_____ 2005「オーストリア国立図書館所蔵『集史』写本調査」『日本モンゴル学会紀要』35, pp. 133–134.
_____ 2006a「ラシードッディーン『集史』第 1 巻「モンゴル史」の諸写本に見られる脱落」『人間環境学研究』5-1, pp. 95–113.
_____ 2006b「ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所における『集史』写本調査」『日本モンゴル学会紀要』36, pp. 83–84.
_____ 2011「『集史』第 1 巻「モンゴル史」の校訂テキストをめぐる諸問題」早稲田大学モンゴル研究所編，吉田順一監修『モンゴル史研究：現状と課題』明石書店 , pp. 44–64.
志茂智子 1995「ラシード・ウッディーンの『モンゴル史』――『集史』との関係について」『東洋学報』76-3·4, pp. 93–122.
志茂碩敏 1995『モンゴル帝国史研究序説――イル汗国の中核部族』東京，東京大学出版会。
白岩一彦 1991「『集史』パリ写本（Supplément persan 1113）について」『オリエント』34-1, pp. 17–31.

白岩一彦 1993「『集史』テヘラン写本（イラン国民議会図書館写本2294番）について」『オリエント』36-1, pp. 55–70.
_____ 1995「『集史』研究の現状と課題」『日本中東学会年報』10, pp. 179–198.
_____ 1997「歴史家ラシード・ウッディーンの生涯と著作（資料紹介）」『アジア資料通報』35-2, pp. 1–12.
_____ 1998「ラシード・ウッディーン『歴史集成』イラン国民議会図書館写本の成立年代について」『オリエント』40-2, pp. 85–102.
_____ 2000「ラシード・ウッディーン『歴史集成』現存写本目録」『参考書誌研究』53, pp. 1–33＋図（巻頭）4p.
_____ 2008「ラシード・ウッディーン国際会議（内外東方學界消息（115））」『東方学』106, pp. 180–186.

〔欧　文〕
SHIMO Satoko 1996, “Ghāzān Khan and the *Ta’rīkh-i Ghāzānī*: Concerning its relationship to the “Mongol history” of the *Jāmi‘ al-Tawārīkh.” Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*（Tokyo）, 54, pp. 93–110.
SHIRAIWA Kazuhiko 1997, “Sur la date du manuscript parisien du *Ǧāmi‘ al-Tavārīkh* de Rašīd al-Dīn.” *Orient*（Tokyo）, 32, pp. 37–49.